様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００４６４

研究課題名（和文）言語風景における〈視〉の制度：視点と移動

研究課題名（英文）The Scopic Regime in Verbal Landscape: Viewpoint and Movement

研究代表者
野田　研一（Noda, Kenichi）

立教大学・名誉教授・名誉教授

研究者番号：６０１４５９６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本課題の主題は、文学における風景表象の形式性と歴史性の解明を主な目的とする言語風景論である。初年度には「固定された視点」の問題を主に検討し、2年目には文学及び風景画の両面に作用している遠近法の理論的問題を考究した。2年目の後半には、新たな概念として 「反散文」の問題に着手し、印刷革命による「均等分割の原理」(マクルーハン)および「言語の視覚化」を批判的にとらえる「反散文論」を提起するに至った。 3年目に、 論文集『耳のために書く 反散文論の試み』(水声社)を刊行し、言語風景論は近代散文の構造と不可分であり、両者が遠近法と活版印刷という近代的な〈視〉の制度に深く根差していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究における第一の成果は、文学・言語における「風景」(landscape)という概念が、近代的な出来事であることの確認である。近代的と判断する根拠は、それが線遠近法に基礎づけられた絵画的概念に由来することにある。近代西欧における風景画の登場を基礎づけた遠近法、その文学への適用が「言語風景」(verbal landscape)である。第二の成果は、遠近法が活版印刷の進展とも密接な理論的・実践的関係を有していたという点で、遠近法と活版印刷との交点が近代散文の成立として明確化されたことである。その結果、風景画と言語風景の共通の基盤を「遠近法的なるもの」すなわち「視点」であると確認することができた。

研究成果の概要（英文）：This research project deals with the form and history of verbal landscape in literary works. In the first year, the "fixed viewpoint" was theoretically discussed, and in the second year, the theory of "perspectival view" was examined as one of the major influential factors in literary landscape as well as landscape painting. Since the latter part of the second year, another concept called "anti-prose" has been newly introduced into my discussion, and this project has been more focused upon the "anti-prose" theory in literary landscape, which is specifically based upon the idea of "homogeneous segmentation" (M. McLuhan) produced by "visualized language," to which the printing revolution in early modern Europe had given a shape. At the end of the final year, a book of collected essays called "Write for the Ear: Toward the Anti-Prose Theory" was published for elucidating how the verbal landscape is deeply connected with modern prose style and the "scopic regime" in art.

研究分野：文学

キーワード：言語風景　視点　言語の視覚化　遠近法　反散文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

文学作品における風景記述の問題＝言語風景論は、とくにエコクリティシズム（環境文学研究）においては、重要な分析対象である。じっさい、18 世紀～19 世紀に隆盛を極めるヨーロッパの近代文学、また明治 30 年代前後に成立すると見られる日本の近代文学、いずれも、自然を描くこと、主題化すること、そしてその具現としての風景の「発見」が、いわば「近代化」への転換を徴づけるものであった。それは同時にロマン主義とも呼ばれる文学の運動であったが、それからすでに 100 年以上の時間が経過した 21 世紀の今日、この文学の「近代化」過程がいかなる様相を呈し、また変貌を遂げているかが、本研究当初の問題意識であった。それは 20 世紀末のエコクリティシズムの登場がもたらした新しい視角、新しい問題意識にほかならない。過去の「ロマン主義」的な自然表象＝言語風景と、20 世紀を経たのちのポストロマン主義的な言語風景とはどう違うのか。その差異の淵源をとらえ直す必要があった。

２．研究の目的

言語風景＝自然記述における表象としての形式性と歴史性の解明を主な目的とする。形式性とは〈視点〉を起点とする均質空間を把握しようとする遠近法的叙述形態の定型性のことであり、その様態の概略を確認すると同時に、その歴史的遷移の相を解明し、近代散文における〈風景〉記述様式が、歴史と〈視〉の制度に規定された様式であることの検証を行う。その際、重要な歴史性の問題として、いわゆるグーテンベルクの印刷革命以降の活版印刷による「言語の視覚化」(マクルーハン)と、絵画における遠近法(視点)の問題が交叉する様相を探ることにある。

３．研究の方法

言語風景における〈視〉の制度と表象の実態を、〈視点〉と遠近法の理論的問題を中心的に検討しつつ明らかにする。研究方法を要約すれば以下のとおりである。

（1）「固定された視点」による対象世界の遠近法的構造化・三次元化の結実としての「単一音調的散文」という概念がいかに風景画と同期的に展開したかを歴史的に観察し、具体的には「単一音調的散文」という概念の今日的有効性を測る。

（2）　20世紀後半以降の問題として、〈視点〉の〈移動〉に起因する言語風景の変容の問題も分析対象とする。

（3）　20世紀以降における〈視点〉論の問題として、遠近法に基づく「〈凝視〉(gaze)の論理」と、脱遠近法的な「〈一瞥〉(glance)の論理」の区分の問題を、具体的な作品の相に即して検討し、〈風景〉の解体と再編の様相を把握する。

（4）　美術史家N・ブライソン等が提示する、遠近法に基づく〈凝視〉(gaze)の論理と反遠近法的な〈一瞥〉(glance)の論理の差異について分析を進める。

（5）　モーリス・メルロ＝ポンティの知覚論を基礎に「風景の誕生」という問題を、脱遠近法の観点から考察する。

（6）日本近代文学における言語風景論を研究史的視点から検討する。

４．研究成果

以下の諸点を明らかにすることができた。

（1）言語風景＝自然記述の形式性の問題を検討するに当たって、もっとも中心的な概念が〈視点〉であることが判明した。この〈視点〉設定の問題こそが本課題の根幹にかかわるものである。

（2）〈視点〉設定は遠近法と不可分の関係にある。したがって、言語風景は遠近法の言語ヴァージョンともいうべきものである。

（3）〈視点〉設定に基づく言語風景は、近代散文の所産であることが判明した。それが「近代」と限定される理由は、（2）に述べたように、遠近法という方法に依拠して成立しているからである。したがって、近代散文は、姉妹芸術ともいうべき風景画の言語ヴァージョンである。

（4）のみならず、言語風景を規定している近代散文は、M.マクルーハンほかの諸研究により、グーテンベルク印刷革命によって具現された印刷物の「均質空間」的様態・構造に規定されたものであることも判明した。

（5）以上、（1）～（4）をまとめれば、言語風景を対象化するには、散文の原理、それを生成した活版印刷の発明、それにより支配的になった「言語の視覚化」といった事象を繋ぎながら考察する必要があるということになる。同時に、言語風景論はたんに言語による自然表象の問題という枠を超えて、近代散文の根底を成す「言語の視覚化」＝活字文化＝文字の文化(literacy)に深く関連することが明らかになった。

（6）したがって、言語風景を論じるためには、次のような理解と方法が必要であることを提起した。つまり、風景記述を分析するに当たっては、《視点・遠近法・描写・風景》の 4 つの概念を別個のものとして扱うのではなく一体的に扱う必要があるということである。これは論文「視点なき思想–反散文論のほうへ」（2024）において詳細に論じることができた。

（7）遠近法と「言語の視覚化」は、W・オングなどが提唱した「声の文化」(orality)と文字の文化の対位の問題にも直結する。そしてこの問題が学問上、より明確に主題化されたのが 1962 年～63 年に刊行された諸研究によるものであることが E・ハヴロック、マクルーハン、オングらの研究により明らかになっている。研究史をたどることにより、ハヴロックが命名したこの「声の文化問題」(orality problem)は、21 世紀の現在まで依然として議論が継続していることも重要な知見となった。

（8）言語風景の問題および「声の文化問題」をめぐる一連の事象は、文学、とりわけ近代文学の生成・展開とも深く関わっている。それを小説(novel)という近代的なジャンルを例に挙げて検討した結果、歴史的に見れば、小説の成立と印刷革命が不可分の関係にあることが明らかになる。印刷なくして小説は存在しなかったという研究者たちの有力な主張を追尋しながら、本研究が主題としてきた言語風景論とは、散文論であり小説論であり、かつ「言語の視覚化」すなわち文字の文化の圧倒的隆盛という近代という時代の特異な事象であることが明らかになった。

（9）また、まったく同じと断言することはできないが、類似の問題は日本の近代文学の創始にまつわる言文一致の問題や言語風景と遠近法との関係などに関連することも明らかになった。したがって、日本の近代文学を遠近法の使用を目安として分析することが可能になる。

（10）風景と風景画の問題を考察するに当たって、西欧の風景画と異なる方法を展開してきたとされる東洋の風景画、中国の山水画や日本の禅画、さらには浮世絵などにおける〈視点〉設定の問題を検討するために、美術史家 N・ブライソンの「凝視」(gaze)と「一瞥」(glance)の理論構成に依拠しつつ、日本国内の美術館における調査を実施した。（コロナ禍により、中国、台湾などにおける調査は断念した。）その結果、大岡昇平の『野火』、石牟礼道子『苦海浄土』に関する風景分析にこの理論的枠組みが有効であることを確認し、それぞれの作品について論考を発表した。その際のキーワードは多視点的かつ脱遠近法的な aspective（歪曲遠近法）であり、「擬似風景」である。

（11）以上の研究を踏まえて、近代における遠近法的な〈視〉の制度(scopic regime)が風景という概念を成立させると同時に、視覚中心主義的な偏向により「声の文化」を抑圧する働きをし

てきた歴史的経緯の確認に基づき、反遠近法的な思考に基づく「視点なき思想」の可能性を「反散文論」の一環として議論に付した。

（12）また、2022 年度後半から 2023 年度前半にかけて「反散文論」をめぐる研究会を連続的に開催し、日本文学、アメリカ文学、フランス文学、環境文学、文化人類学など多様な分野の研究者 10 名による「反散文論」をめぐる学問的応答を得ることができ、それらを集約して本科研費成果論文集『耳のために書く–反散文論の試み』（2024 年 2 月刊）を上梓し、論考「視点なき思想–反散文論のほうへ」を寄稿した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Kenichi Noda	４．巻 66
２．論文標題 Where Is HERE, When Is NOW?: Literary “Presentism” after Romanticism	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Texas Studies in Literature and Language	６．最初と最後の頁 211-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野田研一	４．巻 7
２．論文標題 LandscapeからLandへ　「鹿はニセモノ」説をめぐって	５．発行年 2023年
３．雑誌名 立教ESDジャーナル	６．最初と最後の頁 42，43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野田研一	４．巻 1183
２．論文標題 思想の言葉　〈声〉とものがたりの沃野	５．発行年 2022年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野田研一	４．巻 30
２．論文標題 「感覚合成態」の芸術論：フロレンスキイ『逆遠近法の詩学　芸術言語論集』をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 コメット通信	６．最初と最後の頁 21-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野田研一	４．巻 4
２．論文標題 石牟礼道子の銀河系：「直線の覇権」（インゴルド）に抗して	５．発行年 2021年
３．雑誌名 たぐい	６．最初と最後の頁 126-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 野田研一
２．発表標題 〈武蔵野〉往還　『武蔵野』と『野火』のあいだ
３．学会等名 ASLE-Japan/文学・環境学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 野田研一
２．発表標題 反散文論の方へ　構想の動機および視座
３．学会等名 （科研）反散文論第2回研究会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計5件

１．著者名 野田研一編	４．発行年 2024年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 326
３．書名 耳のために書く　反散文論の試み	

1．著者名 野田研一、後藤隆基、山田悠介編	4．発行年 2023年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 305
3．書名 石牟礼道子と〈古典〉の水脈　他者の声が響く	

1．著者名 小峯和明編（野田研一ほか著）	4．発行年 2023年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 538
3．書名 日本と東アジアの〈環境文学〉	

1．著者名 竹内理矢、山本洋平編（野田研一ほか著）	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 256
3．書名 深まりゆくアメリカ文学	

1．著者名 Xinmin Liu, Peter I-min Hung, eds. (Kenichi Noda, et.al)	4．発行年 2021年
2．出版社 Lexington Books	5．総ページ数 287
3．書名 Embodied Memories, Embedded Healing: New Ecological Perspectives from East Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関